▼最優秀賞受賞作品（ジュニア部門　作文・童話等）

母と私のソーシャルディスタンス

笠井　亜希子

母とけんかした。

きっかけは簡単なこと。とても楽しみにしていた旅行に、行けなくなったのだ。

「しょうがないでしょ、このご時世なんだから。どこかでCOVID－19をひろってきたら、大変よ」

だから我慢してね、と食器洗いをしながら母は言った。

私は正直、我慢の限界だった。ここ数年、兄弟や自分の受験があったため、長期休暇もどこにもお出かけに行けなかった。今年はもう何の心配もせずに旅行へ行けると思っていたのに、今度は正体不明の新型ウイスルのせいで娯楽をつぶされるのかと思うと、ショックで涙も出てこない。

父の職場は、コロナの影響で売り上げが減り、収入が大幅に減った。また、母は医療関係者なので、県外への外出は原則禁止になっていた。とても、旅行に行けるような状態ではないのだ。

「私、何年も旅行に行けなかったんだよ‼なのに、何で今年も旅行に行けないの？」

「旅行に行けてないのはお前だけじゃないだろ。俺達も行きたいけど我慢してるんだよ。なぁ？」

兄はそう言って、姉に同意を求めた。姉は何も言わず、ただ本を読んでいた。姉が本を読んでいるなんてめずらしいなと思いながら、もう一度母に、

「私、コロナなんてどうでもいいから、旅行に行きたいよ‼」

とうったえた。

「なんでいつもわがままばっかり言うの？」

母はイライラしたように言った。その母の口調が気に入らなくて、私はついに怒りをあらわにした。

「もういや‼私、今日からママとソーシャルディスタンスとるもん‼」

母を含め、その場にいた家族全員が、私の言葉に目を点にした。

「なんか、ソーシャルディスタンスの使い方、間違ってない…？」

姉が言った。

その日からは、何をするときも私と母は一定の間隔をとるようになった。毎朝、母が私を起こしにきていたのだが、その役は姉になり、私の洗濯物だけ、母でなく自分でアイロンをかけてたたんだ。習い事の送迎のときも、一言も話さなかった。

それからしばらくたったある日、学校で秋の遠足があった。旅行に行けなくなったことをふと思い出し、少し悲しくなった。

「あれからもう、ひとつきもたったのかぁ」

母と関わらなくなって一ヶ月。母は今、どのような気持ちでいるのだろう。少なくとも私は、このような生活にうんざりしている。あの日、あんなことを言ったのも勢いでだったし、今ではそこまで母のことを恨んでいない。

真の原因はコロナだと、本当はわかっ

ていた。だけど、あの時は旅行を中止にした母がどうしても許せなかった。ただ、私達の健康を考えてそうしただけなのに。

　遠足には、県内の名所の、紅葉がきれいなことで有名な公園に行った。ちょうど、紅葉が咲きほこっていて、まるで楽園のようだった。なぜか見覚えがあるのに、いつここへ来たのかが思い出せなかった。いろいろと考えていると、いきなり視界がぼやけて、徐々に暗くなっていった。

「さあや、紗彩（さあや）!!」

　目が覚めると、私は病室で寝かされていた。となりで、白衣を着た母が私の名を呼んでいた。

「気が付いた?あーもう、びっくりしたじゃない!!」

母は、やれやれというような顔をした。

「えっ、でも、なんで?」

「あんた、覚えてないの?公園でいきなり倒れたらしくって、救急車でここまで運ばれてきたから、もう心臓が止まるかと思ったわよ」

そういえば、母の勤める病院はあの公園の近くだった。

「原因は、食生活の乱れらしいわよ」

母は少し厳しい口調で言った。一ヶ月前からずっと意地をはって、母の作ったご飯を食べずにコンビニ弁当を買うか、もしくは何も食べないかで過ごしてきたのが、たたったのかもしれない。

「それはそうと、あの公園、あなたが小さい頃によく行ったわね」

　そうだった。私は小さい頃、母のそばを離れるのが嫌で、できるだけ長い時間、母と一緒にいられるよう、院内の託児所に毎日通っていた。仕事が早く終わった日は、母と公園で遊んでから帰った。あの頃は、本当に楽しかった。母の顔を見るだけで心が落ち着き、公園では二人でかくれんぼをしたり、秋には紅葉で遊んだりした。私がしたいと思うことはすべてさせてくれた。だから、兄弟と比べてもここまでわがままになったのかもしれない。しかし、楽しい日々はそう長くは続かなかった。私が小学校に上がる頃になると、母はだんだん忙しくなり、家族で出かけることはあまりできなくなっていった。だからこそ、今年の長期休暇の旅行はとても楽しみにしていたのだ。

「今年の冬休み、家族で近場でどっか行こ！夏休みに行けなかった分…」

と母が言いかけたとき、私のお腹が鳴った。

「とりあえず、一緒にご飯食べにいこっか」

母が苦笑いしながら言った。

「えっ、そんな、大丈夫だよ。夕飯ぐらい、一人で食べにいけるよ」

「あんたの大丈夫は、いつも大丈夫じゃないんだから。あと、コンビニ弁当は禁止だからね。これからは、私のおいしーい料理を毎日食べてね！」

そう言いながら、母は笑顔で手をさし出した。私はその手をとり、ベッドから立ち上がった。

　帰り道、私は母と手をつなぎながら歩いた。

「もう、ソーシャルディスタンスはとらないの?」

と母が言ったので、私はあっと言った。

でも、

「やっぱ、ソーシャルディスタンスには限界があるね」

と言い、母の肩に顔を寄せた。

夜空に浮ぶ満月の光が、親子をやさしく包みこんだ。